TADOKU JUNIOR　はじめての名作童話　★★★☆☆ ふつう　798語

Sweet Porridge

おいしいおかゆ

Katharine Pyle（1918年の本）　原文そのまま　朗読：Reeses118

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　やさしい女の子がおばあさんからもらったのは、おかゆがわいてくるまほうのなべ。でも、止めることばをわすれてしまったら……！？

There was once a poor widow who had only one daughter, a child who was so good and gentle that everyone who knew her, loved her.

One day the child went into the forest to gather firewood, and she was very sad because there was nothing left in the house to eat, and because she and her mother were so often obliged to go hungry.

She had already gathered a bundle of sticks, and was about to go home, when she saw a poor old woman who had also come to the forest for wood. The woman was so bent and stiff that it was pitiful to see her. The child felt sorry for her and wished to help her.

“Good mother,” said she, “let me gather the wood for you; it must be hard for you to stoop.”

She put down her own load, and gathered for the old woman as much as she was able to carry. “I would take it home for you,” said the little girl, “but my mother is waiting for me, and I must make haste, for I am already late.”

“Child,” said the old woman, “you have a good heart, and you deserve to be rewarded.” She then drew out from under her cloak a little iron pot. “Take this,” she said. “It is a magic pot. Whenever you are hungry you have only to say—

“‘Boil little pot

Till the porridge is hot,’

and it will begin to boil and fill up with sweet porridge. When you have had enough say—

"'Cease little pot,

The porridge is hot,'

and it will stop boiling."

She made the child repeat the words after her several times, and she then gave her the pot and hobbled away through the forest.

The child was filled with joy at the thought that now she and her mother need never be hungry again. She ran home as fast as she could, carrying the pot with both hands.

When she came in her mother asked her where the wood was.

"I have brought home something better than wood," cried the child. "The wood only warms us, but here is something that will feed us as well." She set the pot upon the table and said:

"Boil little pot

Till the porridge is hot."

The pot at once began to bubble and boil, and soon it was full and brimming over with sweet porridge. The widow caught up a spoon and dipped some of the porridge out into a bowl, but the more she dipped out the more there was in it. When all the bowls in the house were full, the child said:

"Cease little pot,

The porridge is hot,"

and at once the pot stopped boiling.

The widow was overjoyed at the treasure the little girl had brought home. "Come," cried she, "let us sit down and eat."

“Yes, dear mother,” said the child, “but first I will carry some of the porridge to the neighbors who were so kind to us when we had nothing.”

She filled a large kettle with porridge and started out with it, but no sooner had she gone than the widow began to wonder whether they had kept enough for themselves. She did not feel satisfied, so she said to the pot:

“Boil little pot

Till the porridge is hot.”

Immediately the pot began to bubble and boil. Soon it was full and the porridge began to run over. The widow wished to stop it, but she had forgotten what to say. “Enough!” she cried. “Stop! Stop!” but the porridge still boiled up and over the edge of the pot. The widow caught up the spoon and again began dipping out the porridge; she dipped as fast as she could. Soon all the pots and pans in the house were full and still the pot continued to boil out porridge. In despair the widow seized the pot and threw it outside the door, but the porridge flowed out from it in a stream, and ran down the road.



The little girl was coming home when she met the stream of porridge, and at once she guessed what had happened. She ran as fast as she could and when she came to the place where the pot lay she cried:

“Cease little pot,

The porridge is hot."

At once the pot stopped boiling, but already enough porridge had been wasted to have fed the whole countryside.

After that the widow never again dared to tell the pot to boil. When they wished for porridge it was the child who spoke to it. But from then on she and her mother never lacked for anything, for the porridge was so delicious that people came from far and near to buy from them.

和訳 おいしいおかゆ（Sweet Porridge）

むかし、まずしいおかあさんがいて、むすめが1人だけいました。その子はとてもいい子でやさしかったので、知っている人はみんなその子が大好きでした。

ある日、その子はまきを集めに森へ行きました。家には食べる物が何ものこっていなくて、おかあさんと2人、おなかをすかせることがよくあったので、その子はとてもかなしい気持ちでした。

小えだをひとたば集めて、家に帰ろうとしたとき、やはりまきをひろいに森へ来ていた、まずしいおばあさんが目に入りました。おばあさんはこしがまがって、体がかたく、見ていてかわいそうになるほどでした。女の子はおばあさんが気のどくになって、手つだってあげたいと思いました。

「おばあさん」と女の子は言いました。「まきは、わたしがひろってあげます。かがむのはたいへんでしょう。」

女の子は自分の荷物をおろして、おばあさんが運べるだけのまきをひろってあげました。「おうちまで運んであげたいけれど」と女の子は言いました。「おかあさんが待っているし、もうおそくなってしまったから、いそがなくちゃいけないの。」

「おまえさん」とおばあさんは言いました。「おまえさんは心がやさしいね。ごほうびをあげなくちゃ。」そしておばあさんは、マントの下から小さな鉄のなべをとり出しました。「これをお持ち」とおばあさんは言いました。「まほうのなべだよ。おなかがすいたら、こう言うだけでいいんだ。

『にえろ、小さななべ、

おかゆがあつくなるまで』

そうすると、なべはぐつぐつにえて、あまいおかゆでいっぱいになる。もうじゅうぶんになったら、こう言うんだよ。

『やめろ、小さななべ、

おかゆはあつくなった』

そうすれば、にえるのが止まるからね。」

おばあさんは女の子に、そのことばを何回もくりかえして言わせました。それからなべをわたすと、森の中をよたよたと歩いていってしまいました。

これでもう、おかあさんと2人、おなかをすかせることはないと思うと、女の子はうれしくてたまりませんでした。女の子はなべを両手でかかえて、力いっぱい走って家に帰りました。

女の子が帰ってくると、おかあさんは、まきはどこにあるのとたずねました。

「まきよりいいものを持ってきたの」と女の子はさけびました。「まきは体をあたためてくれるだけだけど、これはおなかもいっぱいにしてくれるのよ。」女の子はなべをテーブルにおいて、言いました。

「にえろ、小さななべ、

おかゆがあつくなるまで。」

なべはすぐにぶくぶく、ぐつぐつにえはじめ、まもなくあまいおかゆでいっぱいになって、あふれそうになりました。おかあさんはスプーンをつかんで、おかゆをお皿によそいましたが、よそえばよそうほど、なべのおかゆはふえていきます。家じゅうのお皿がいっぱいになると、女の子は言いました。

「やめろ、小さななべ、

おかゆはあつくなった。」

すると、なべはすぐににえるのをやめました。

おかあさんは、むすめが持って帰ってきた宝物に大よろこびしました。「さあ」とおかあさんはさけびました。「すわって食べましょう。」

「ええ、おかあさん」と女の子は言いました。「でも、その前に、わたしたちに何もなかったとき、とても親切にしてくれたご近所の人たちに、おかゆを少し持っていくわ。」

女の子は大きななべにおかゆを入れて出かけましたが、女の子が出ていくとすぐに、おかあさんは、自分たちの分がじゅうぶんのこっているかしらと心配になりました。どうもまんぞくできなかったので、おかあさんはなべにむかって言いました。

「にえろ、小さななべ、

おかゆがあつくなるまで。」

すぐになべはぶくぶく、ぐつぐつにえはじめました。まもなくなべはいっぱいになり、おかゆがあふれだしました。おかあさんは止めようとしましたが、なんと言えばいいのかわすれてしまいました。「もういいわ！」とおかあさんはさけびました。「止まって！止まって！」でも、おかゆはなおもにえたって、なべのふちからあふれ出てきます。おかあさんはスプーンをつかんで、またおかゆをすくいはじめました。できるだけ速くすくいました。まもなく家じゅうのなべやフライパンがいっぱいになりましたが、それでもなべは、おかゆをにやしつづけました。どうしようもなくなって、おかあさんはなべをつかんで戸の外へなげすてました。でも、なべからはおかゆが川のように流れ出して、道をどんどん流れていきました。

家に帰るとちゅうだった女の子は、おかゆの川に出会って、すぐに何がおきたのかわかりました。女の子は力いっぱい走って、なべがころがっているところまで来ると、さけびました。

「やめろ、小さななべ、

おかゆはあつくなった。」

すぐになべはにえるのをやめましたが、そのときにはもう、あたり一面の人たちが食べられるほどのおかゆが、むだになっていました。

それからというもの、おかあさんは二度となべに「にえろ」と言うことはしませんでした。おかゆがほしいときは、女の子がなべに話しかけました。でも、そのときから、女の子とおかあさんは、何にもこまらなくなりました。おかゆがとてもおいしいので、遠くからも近くからも、人々が買いに来たからです。

たんご と クイズ おいしいおかゆ

pot なべ	**porridge** おかゆ	**spoon** スプーン
bowl お皿・おわん	**firewood** まき	**kettle** 大きななべ

Q1 **おばあさんが女の子にくれたものは？**

① まほうのなべ　② 金のスプーン　③ パンのかご

Q2 **女の子が、食べる前におかゆを持っていったのはだれのところ？**

① 森のおばあさん　② 親切にしてくれたご近所の人　③ 王さま

Q3 **おかゆがあふれて止まらなくなったのは、どうして？**

① なべがこわれたから　② 女の子がいたずらしたから　③ おかあさんが止めることばをわすれたから

こたえ

Q1 ①　まきひろいを手つだってくれたお礼に、おばあさんはおかゆがわいてくる小さな鉄のなべをくれました。

Q2 ②　何もなかったときに親切にしてくれたご近所の人たちに、まずおかゆを持っていこうとしたのです。

Q3 ③　おかあさんは「にえろ」と言ったものの、止めることばをわすれてしまったので、おかゆが止まりませんでした。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Reeses118（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。